

「エレメント」を問うとは、どういうことか？

古荘 真敬（東京大学）

松永氏のいう「経験のエレメント」とは、いったい何なのか？ 氏によれば、「経験」とは、「人が各自自分の生の主人公として生きることの総体」のことであり（『経験のエレメント』2015年、p. v）、「生きること」は、動物として「物的環境世界を生きる」ことであるとともに「意味世界を生きる」ことでもあるとされている。そして、これら二様の「生きること」の間には明らかな基づけの関係があり、意味世界は、人が「物的環境世界に生きるという根本」があってはじめて、「その上にひろがるものである」（p. i）と、氏は考えている。この基本的な構図のもと、「物的事柄への意味の関与が加わる前」（p. ii）における経験の基礎構造を浮き彫りにすることが、彼のいう「経験のエレメント」を明らかにすることなのである。

具体的には、「体の感覚」「体の運動」「物象の知覚」の三者が、そのエレメントとして取り上げられているが、とりわけ重要な位置を占めていると思われるのは「体の感覚」である。私は、まずは、松永氏が、デカルトに発する西洋近代哲学における観念論の構図を批判する次のような言葉のなかに、そのエレメント論の核心的な狙いを読み解いてみたい。曰く、いくら観念論が、われわれは、「体の実在」に、「思考内容としての〔…〕感覚」から出発して行う「論証」によって到達するしかない、などと主張しようとも、「体はまさに感覚においてその実在性を示し終えているのであり、感覚を媒介に間接的に狙われるべき何かではないのである」（p.237）。

だが、次に私は、こうした議論において松永氏が提示する、「体の存在が存在概念の原型である」（cf. p.224ff.）というテーゼのうちに（そのデカルト批判にもかかわらず）潜んでいるように思われる solipsistic な含意について、少々慎重に検討してみたいと思う。ここにおいて存在概念の「原型」として機能している体は、氏の叙述においてはさしあたり、もっぱら「自分」のそれとして考えられているように見えるが、はたして、それだけでよいのだろうか？ 松永氏の実際の現象記述のなかには顔をのぞかせながらも、しかし、「エレメント」としては明示的に取り上げられない第四の契機について考えてみよう。そうした検討を通じて、経験の「エレメント」といったものを問うことの哲学的な意味についてあらためて吟味することが、本提題の狙いである。